

夏は終わらない その3

「現代文」の読み方には、コツがある。

1 記述式評論

文章全体を把握するために、その出典と著者をまず確認する。

日頃から、授業や、模擬試験の解説などにより、その論点の課題の中心が、「近代批判」なのか、「科学的な考え方の限界」なのか、「ナショナリズムの問題」なのか、「身体論」なのか、「貨幣価値」なのか、ある程度予想したのち、大きな段落の流れに沿って論点の流れをつかんでいく。

その時に、注意するのは、接続詞の働きである。特に、逆接の接続詞の次のセンテンスは、著者の主張が現れることが多い。

答案は、設問に答えの流れが隠れているので、その流れに沿って構造化すると答案として完成に近づく。

例えば、「Aは、どういうことか、具体的な例に沿って説明しなさい。」との設問ならば、具体的な例をきちんと文章から見つけ出し、そのことが何の具体例なのかのエビデンスを提示して、どういうことなのかについてまとめるという具合である。

また、「AがBであることはなぜか。」という設問ならば、Aという内容について書き、それがBであることの原因を説明し、根拠として～だからでまとめていくという具合。

2 記述式小説

文章全体の前に必ず登場人物や時間や場所の説明のリード文があるので、そこから、小説の中の人間関係と設定を把握する。

次に、かならず、「言動」(言葉と動作)が設問になるので、その言動が生まれる「内面」をきちんと把握し、その内面がどのような「背景」から浮かび上がるのかを確認する。解答は、こんな背景がこんな内面を形作ったので、このような言動がありましたの流れに沿って書くとよい。

例えば、子どものころに女性から精神的な圧迫を経験した僕は、どうしても女性の心理的内面を想像することが苦手なので、ある女性の「あなたはずるい」という訴え言動に対して、「当たり前のことをしたまでだ」と親身に考える気持ちをもてないでいるというのなら、この流れに沿って、回答を作るということ。

「子供の時のつらい経験がB子の心の動きを知る必要性を拒絶させ、A

はその瞬間、心にもないことを言わざるを得ない状況を生んでしまった」と書くということ。

記述式は、著者や作者の言いたいことをすかさずくみ取り、簡潔に答える技術が必要である。その簡潔さに個人の力量が現れる。

採点者は、一番其所を採点の核として点数化する。時折、感動する回答もある。

3 センター評論、小説

文章の読み方は記述と同じだが、設問の選択肢全部を読むので、読みながら、文章全体の読みと違和感が伴う部分をきちんと記すことが大事。設問者は、間違いの選択肢を作るときに、いろいろな手立てを講じるので、「意味的にはあっているがこの文章でいっていることではないこと」、「ある部分をあげさに書くことにより論旨をゆがめること」、「反対概念を用いることで混乱をきたすこと」、「原因と結果や根拠と表象を逆にすることにより迷わせること」という誤答を作る手立てについて、ノイズとして違和感をかき取ることでその誤答をより分けることができるようになる。

明らかなことは、正答をまず作って、そののちに誤答が作られること。必ず一つの正答があること。過去問を積み重ねるとその時片が少しずつ、こんがらがったひもがほどけていくようにわかり始める。

4 今後の学習

ある時間を設定し、文章を読む訓練をする。どんな内容なのか、著者の主張は何か、その主張を展開するときの根拠は何か、その根拠を使い理由は何か、その題材についての予備知識として何を準備すべきかをきちんとまとめていく。回答については、設定した時間内にできなかつたら、すかさず正答を見る。その正答から、答え方を類推していく。

間違っはいけない。文章の読み取りはとことんやる。

解答の作り方は、正答から類推する。いわば逆算するのだ。

自分の中にある程度のストックができれば、それについてまとめておく。

5 現代文は難しいが、難しい現代文こそ、点数差がつきやすい。英語の長文と同じである。数学の解法と同じである。

自分の頭で考えないとできないのである。とことん考えて、その道筋を発見できれば、大きな武器となるのである。

さあ、まだまだ夏は終わらない。

